様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２１ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３０９５２

研究課題名（和文）デューイ教育思想における「ヘーゲル主義的なもの」とその再評価に関する研究

研究課題名（英文）Study on Hegelianism in Dewey's Philosophy and its Evaluation

研究代表者
松下　晴彦（MATSUSHITA, HARUHIKO）

名古屋大学・教育発達科学研究科・教授

研究者番号：１０１９９７８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、デューイによる未公開のセミナーと講義ノートの収集と分析であった。従来のデューイ研究では、デューイは、ミシガン大学からシカゴ大学に移った前後に、ヘーゲル主義的な観念論から離脱し、実験主義期に移行したということになっているが、本研究の仮説は、デューイの中でその種の劇的な移行はなく、哲学的方法をめぐる省察が徐々になされたとのではないかというものであった。この仮説の検証のために、シカゴ大学時代の演習を入手し分析した結果、少なくとも20世紀への転換期までは、ヘーゲル哲学について講義を続けており、ヘーゲル哲学とイギリスその他の新ヘーゲル主義とをデューイが峻別していたことが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to break with the traditional understanding of Dewey’s turn from Hegelianism toward pragmatism, arguing instead that Dewey’s later philosophy was a gradual and naturalistic modification of his Hegelianism. In order to prove this, I collected and examine several of Dewey’s writings in 1890s and Dewey’s lecture on Hegel at the University of Chicago.Through this analysis, I made it clear that Dewey made a clear distinction between Hegel’s ideas and Hegelian thoughts developed in U. K.

研究分野：教育学

キーワード：デューイ　ヘーゲル　実験主義　アメリカ教育　教育哲学　教育思想

１．研究開始当初の背景

デューイ思想とその教育学の研究は、国の内外において、過去１世紀以上にわたっておこなれてきた。その一般的な特徴は、先ず１）デューイ思想を、観念論期、実験主義期、自然主義期に区分して捉え、特に最初の観念論期はヘーゲル主義の立場であり、その後克服、離脱されたと理解する。次に２）デューイ教育学説は、シカゴ実験学校での実践を背景に、心理学的機能主義、プラグマティズム、道具主義の結実として、実験主義期に形成されたというものである。こうした一般的な解釈に対して、近年、特に米国において、新ヘーゲル主義からのデューイの離脱や、W.ジェームズや C.S.パースのデューイ哲学への影響を否定するものではないが、ヘーゲル哲学のデューイ思想への影響は生涯にわたるものであったという解釈が新たに提示され始めている。その主なものは、J.R.Shook, Dewey's Empirical Theory of Knoeledge and Reality (2000), T.C.Dalton, Becoming John Dewey (2002), J.A. Good, A Search for Unity in Diversity (2006)などである。

これらの研究の根拠となっているのが、近年、新たに編集され始めた、ミシガン大学時代、シカゴ大学時代（また一部コロンビア大学時代）のデューイによるヘーゲル哲学に関するセミナー、講義ノートである。デューイは、講義やセミナーを実施する際に、今日の TA に相当する学生に速記録をさせていたことが知られている。また聴講学生やその他の受講学生が雇用した速記録者による記録が現存している（デューイ自身の講義ノートは今のところ現存していないと思われる）。新たに入手可能となった資料は、ミシガン大学からシカゴ大学時代を通じて、デューイが継続してヘーゲルに対し強い関心を寄せていたことを示すものであり、一般的な解釈「1890 年以降、つまりミシガン大学時代末期に、ヘーゲル哲学との決別があった」という解釈を覆す可能性があると予想される。

初期のデューイ思想に関する研究として、米国では、M.White, The Origin of Dewey's Instrumentalism (1943), R. B. Westbrook, John Dewey and American Democracy (1991), R.Bernstein, John Dewey (1966)等が知られ、我が国では、栗田修『デューイ教育学の起源』(1979)、森田尚人『デューイ教育思想の形成』(1986) などがあり、これらは、デューイ思想の起源として、ハックスリーの生物学的進化論、スコットランド学派との対決、英国の新ヘーゲル主義からの影響などを論じているが、これらの研究は上記の資料が知られる以前であったこともあり、デューイの生涯にわたるヘーゲル哲学の影響については、考察の対象外となっている。

２．研究の目的

これらに対し、本研究は、最新の資料と近年のデューイ研究の動向を踏まえ、実験主義期以降のデューイ思想にヘーゲル哲学がどのように継承されているかという問題を、デューイ思想における「ヘーゲル主義と観念論の自然主義化」という観点から解明しようというものである。

より具体的には、近年新たに編集され始めた、ミシガン大学時代、シカゴ大学時代のデューイによる「講義ノート」を手がかりに、第一の目的は、デューイ教育思想の形成過程におけるヘーゲル哲学の影響について再検討し、デューイ思想の諸概念と枠組みの淵源と展開をヘーゲル主義との関連で明らかにすることであり、第二に、デューイの教育観、「成長としての教育」「経験の連続と再構成」「探究（問題解決）能力の育成」などを「ヘーゲル的な残滓」の観点から再考することにより、難解でまた実践的でないとされてきたデューイ教育思想全体に関する、より説得的で整合的、容易な理解の枠組みを提示することであった。

３．研究の方法

本研究課題の遂行にあたり、次のような視点と方法を採った。(1) デューイが影響を受けたというヘーゲル主義とはどのようなものであったのか、(2) デューイはそれをどのように受容し、超克しようとしたのか、(3) ヘーゲルからの「離脱」の真に意味するものは何か、そうした影響と超克はデューイ思想形成においてどのような痕跡として確認できるのかといった諸点である。

(1) については、19 世紀後半の米国のヘーゲル研究、セントのルイス学派の新ヘーゲル主義的文化運動の分析を中心に行った。特に H.S.ハリス、D.デイヴィドソンらによる『思弁哲学研究』に掲載された諸論文の分析である。(2) について、ミシガン大学・シカゴ大学時代のデューイによるセミナー・講義ノートを精査することにより、実験主義時代におけるヘーゲルに対するデューイの見解を吟味した。この時期は、デューイが精神を、有機体と環境との相互作用によってうまれる客観的な意識の過程と捉え、さらに有機体が環境に働きかけていくときの知性の働きに注目し始めた時期である。環境に適応する能動的な個人という捉え方と、ヘーゲル的な「絶対精神」（合理的に再構成された宇宙の実現）との比較、当時デューイが使用していたヘーゲルのテキストとの照合もあわせて行い、（実験主義確立期における）デューイ思想形成の新たな解釈を提示し、吟味した。(3) については、デューイの講義ノートを論拠とする最近のデューイ研究をレビューし、「ヘーゲルからの離脱」といわれてきた 1903 年以降の「ヘーゲル的なもの」についての考察を行った。特に、ヘーゲルの「判断形成」とデューイ論理学の相似性、ヘーゲルの弁証法に対し、デューイの普遍・特殊・個別命題の峻別とそれらの間の相互作用的な捉え方、他の自然主義的著作への影響（ヘーゲ

ルから
の継承）を明らかにすることを心がけた。

４．研究成果

本研究課題の中心は、デューイによる未公開のセミナー・講義ノートの収集と分析であった。より具体的には、南イリノイ大学カーボンデール校にあるモリスライブラリーを調査訪問先とし、ジョン・デューイ・スペシャル・コレクション所蔵の資料より、シカゴ大学時代の演習（ヘーゲルの精神現象学）を入手した。デューイの講義ノート、受講生による速記録から、少なくとも、20 世紀初頭の転換期にいたるまで、デューイは、ヘーゲル哲学について（特に精神現象学と大論理学）講義を続けており（つまりヘーゲル哲学に関心を抱き続け）、かつヘーゲル哲学自体とイギリスその他における新ヘーゲル主義・観念論哲学とを、デューイが明確に峻別していたことが資料の分析より判明した。

従って、従来のデューイの思想的展開に関する通説、ミシガン大学からシカゴ大学にデューイが移籍した前後に、ヘーゲル主義的な観念論から離脱し、プラグマティズムに特徴的な実験主義期に移行したという説に対し、本研究の仮説、デューイのなかでその種の劇的な離脱や移行はなく、20 世紀の初頭にいたるまでの 10 年間の間に、その哲学的方法とスタンスをめぐる省察は徐々に遂行されたという仮説はある程度実証されたものと判断できる。

他方、自然主義期以降のデューイ思想のなかにヘーゲル哲学の残滓、痕跡をどのように認め、再評価することができるかという諸点については尚慎重な精査を要する課題である。本研究の期間内に訪問調査ができなかったミシガン大学のベントレー歴史図書館でのデューイ関係資料と調査、シカゴ大学のレーゲンシュタイン図書館での資料収集とその分析は今後の課題とし、デューイの晩年の思想におけるヘーゲル哲学の残滓の有無に関する研究は今後の課題である。

従来のデューイ教育学の解釈では、『学校と社会』『子どもとカリキュラム』『民主主義と教育』などにおける子どもの興味・衝動の重視、問題解決能力の育成、反省的思考の過程など、デューイの思索の帰結が教育方法への示唆として取り上げられ、しかる後に、いかに実践に活かすべきかという順序で語られる傾向にあった。しかし、本研究においては、帰結としてのデューイ教育学ではなく、実験主義の枠組みに、ヘーゲルの有機的・全体論的な解釈の軸を加えること（デューイはヘーゲル主義者であったという解釈）により、有機体としての学習者の存在、外部を認めない探究、経験の連続性と再構成などのより根源的で、包括的、立体的、全体論的な理解が可能となった。

さらに、従来、デューイの語彙、用語は曖昧で相対主義的だと批判されてきた。例えば、通常、私たちは、対象を研究して内容を得ると考えるが、デューイは内容を操作して対象を得ると考える。彼にとっての探究の対象は、結果としてあるもので、探究の操作とは別にあらかじめ想定されているものではない。このことは、思考操作の前に存在する知識対象を否定したヘーゲルの考え方を継承したものと捉えると理解は容易となる。本研究課題のインプリケーションは、デューイ哲学、教育学の難解さと曖昧さをヘーゲル的な解釈で補うことにより、より実践的で具体的な理論へと展開できるのではないかという提案である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

松下晴彦「1903 年から 1915 年のデューイによるヘーゲル解釈とその批判」（名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）第 61 巻第 2 号、2015 年）43－51 頁、査読なし。

松下晴彦「デューイの道具主義的論理学」（名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）第 61 巻第 1 号、2014 年）1-10 頁、査読なし。

松下晴彦「デューイ哲学における自然主義化されたヘーゲル」（日本デューイ学会紀要、第 54 号、2013 年）109-119 頁、査読有り。

松下晴彦「『生活様式としての民主主義』の倫理とその可能性」（名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）第 60 巻第 1 号、2013 年）1-11 頁、査読なし。

松下晴彦「Ed.D 学位授与の現状について」（文部科学省特別経費（プロジェクト）『教員養成モデルカリキュラムの発展的研究』2013 年）3-23 頁、査読なし。

松下晴彦「バーリントン哲学とジョン・デューイ」（名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）第 59 巻第 1 号、2012 年）17-28 頁、査読なし。

松下晴彦「19 世紀アメリカ教育思想黎明期におけるヘーゲル主義」（アメリカ教育学紀要、第 23 号、2012 年）15-26 頁、査読有り。

〔学会発表〕（計 4 件）

松下晴彦「現代アメリカ教育思潮の変遷と展望-政治哲学・文化政治学・教育政策からみるアメリカ教育の動向」（アメリカ教育学会第 26 回大会、名古屋大学、2014 年 10 月）

松下晴彦「（課題研究）民主主義の（再）構築に向けたカリキュラム論の研究：『生の様式としての民主主義』の倫理とその可能性」（日本カリキュラム学会、上越教育大学、2013 年 7 月）

松下晴彦「民主主義社会の（再）構築に向けたカリキュラム論の探究」（日本カリキュラム学会、中部大学、2012 年 7 月）

松下晴彦「日本の大学の現状と課題」（日中

高等教育セミナー（招待講演）、南京師範大学教育学院、2012 年 11 月）
〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
松下　晴彦（MATSUSHITA, HARUHIKO）
名古屋大学大学院・教育発達科学研究科・教授
研究者番号：10199789

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：